

海岸漂着ごみ

発泡スチロール処理機購入へ

江田島市 破碎・圧縮 固形燃料に

江田島市は、海岸に漂着して問題になっている発泡スチロールを破碎して圧縮する機材を購入する。市が負担するごみ処理費を軽減するためで、圧縮後は固形燃料の材料に再利用できる。機材は漁協にも貸し出し、官民一体でごみ対策を進める。5日、機材を使った処理実験を市内で始めた。

(加茂孝之)



処理機を使って発泡スチロールを破碎し圧縮する市職員たち

機材は発泡スチロール減容機と呼ばれ、長さ約110センチ、直径約65センチの発泡スチロール1本を約4分で約8分の1の容積に圧縮できる。圧縮した発泡スチロールは、専門業者が引き取り、木や紙と混ぜて固形燃料にすることができ、資源のリサイクルにもつながる。市内では、年間300万円程度という。

0〜400本の発泡スチロールが回収されており、カキいかた用の浮きとして使っていたものが大半という。

海岸での回収ごみは市が処理費を負担し、粗大ごみと一緒に呉市のごみ焼却施設「クリーンセンターくれ」に持ち込んで焼却処分している。圧縮すると輸送コストが約10分の1に軽減できるとい

う。処理実験は、古紙などの一時保管所となっている江田島町の市リレーセンターで始め、発泡スチロール約100本を破碎し圧縮した。

発泡スチロールの圧縮処理については、水産庁の外郭団体の社団法人マリンプル21が漂着ごみに悩む各地の自治体に技術指導を進めている。市は本年度中に機材を購入する。

今後、漁協でも実験をし、漁業者に操作法を説明する。市環境課の篠木静博課長は「漁協と協力しながら漂着ごみの処理を進め、環境美化につなげたい」と話している。